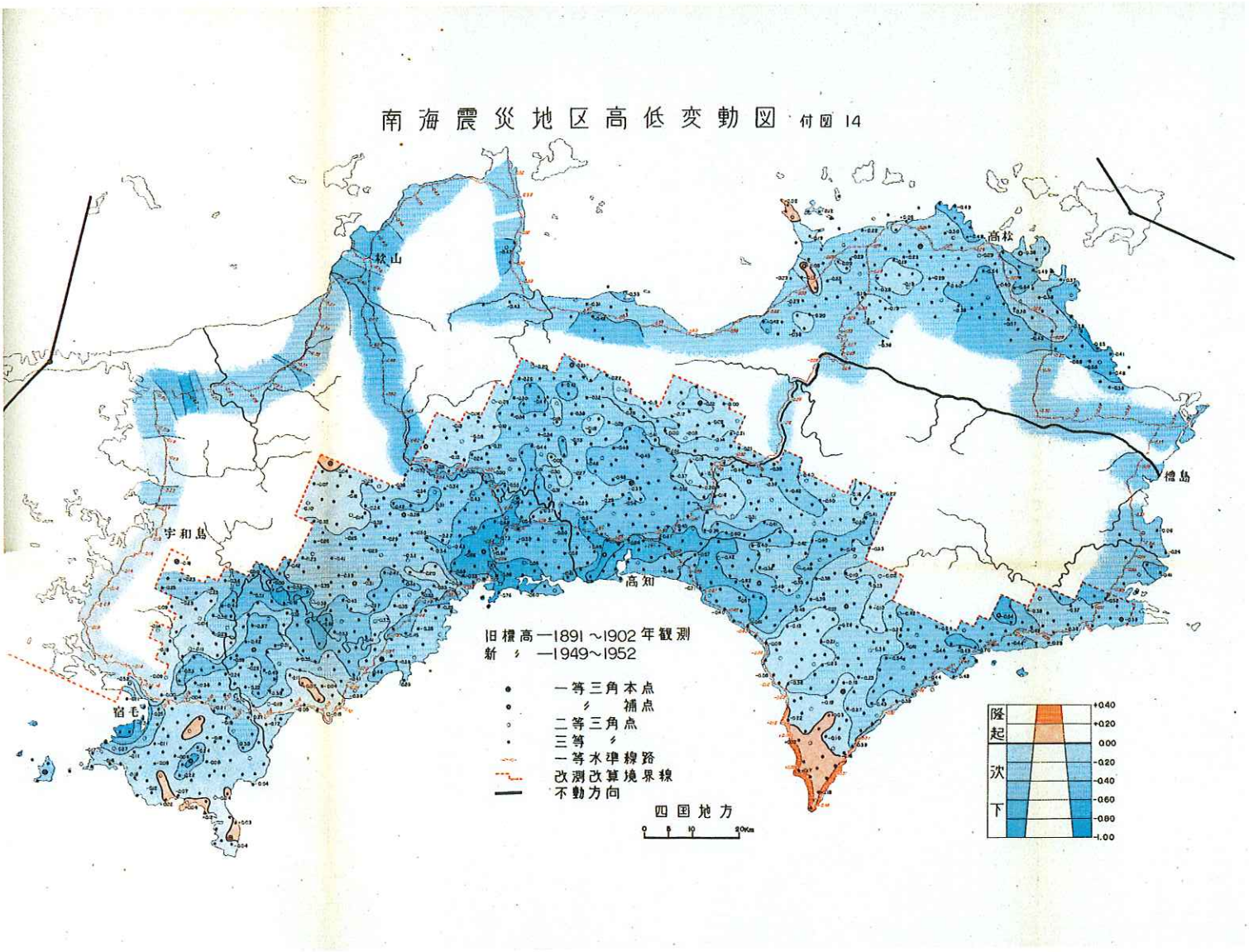
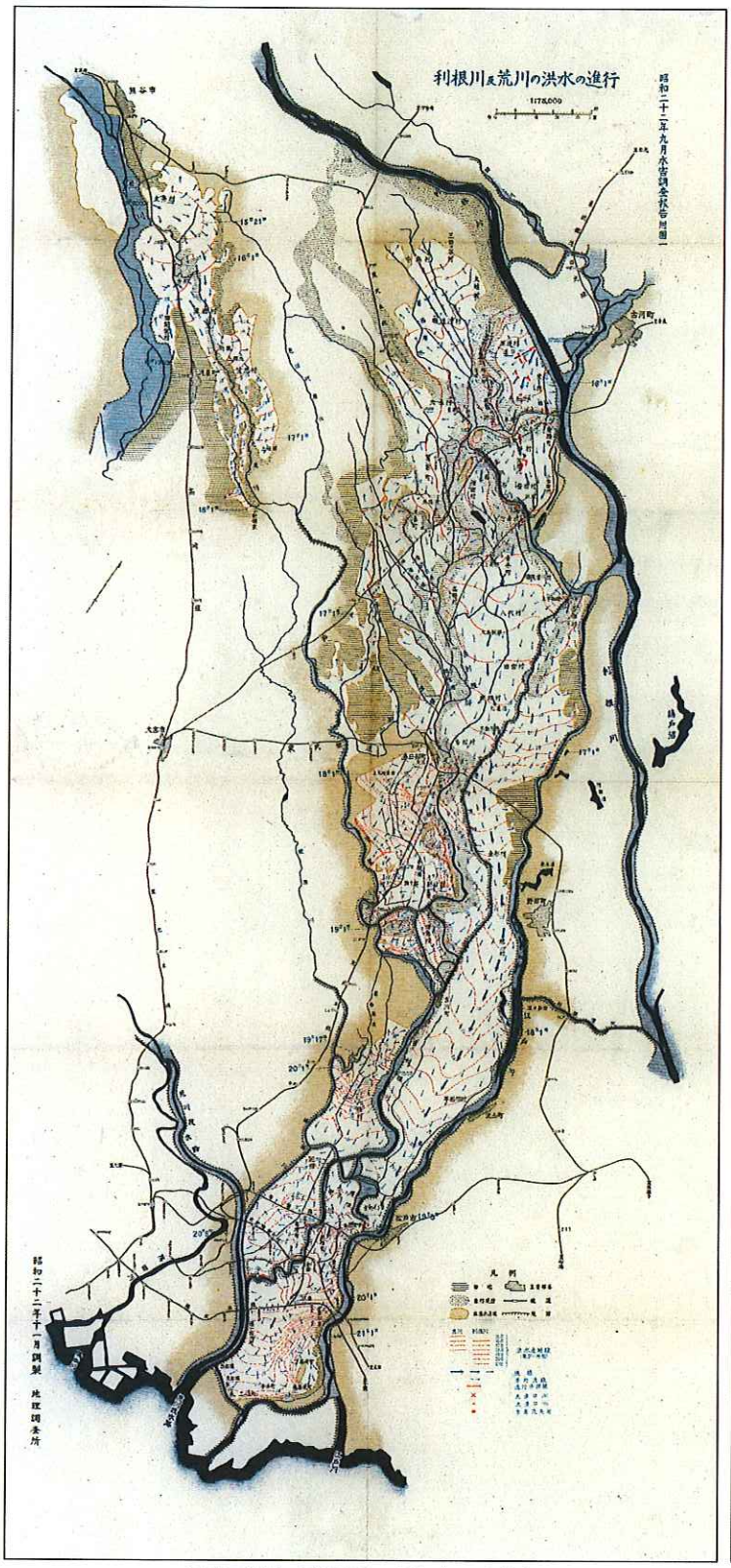


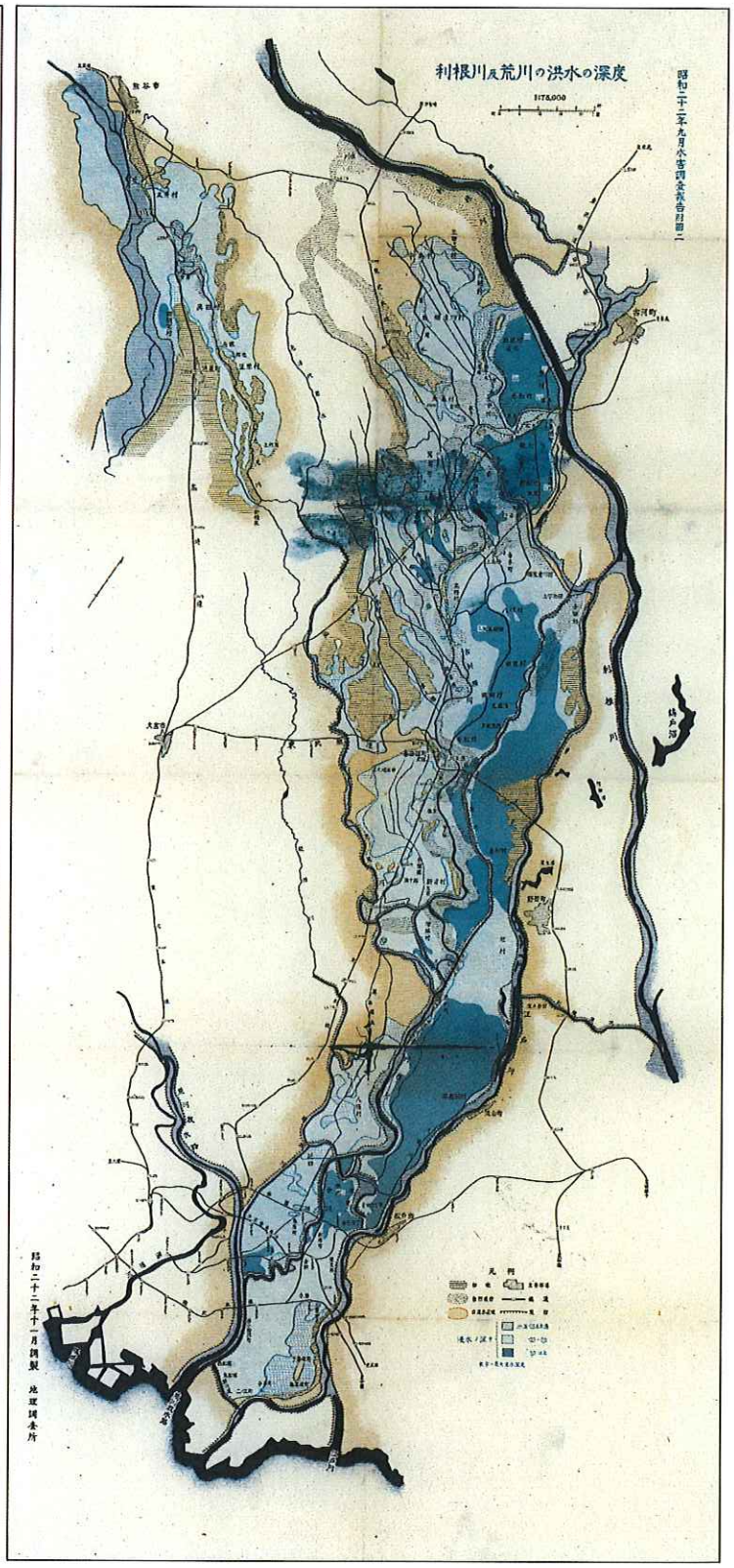
南海地震（1946 年 12 月）による被害は、中部以西の日本各地にわたり、家屋の倒壊や焼失、津波は静岡県より九州にいたる海岸に来襲しました。

また、震災地域は、大きな地殻変動にも襲われました。図は、地震後に実施された水準測量と三角測量とによって得られた高低変動です。オレンジ色の箇所が隆起、青色系が沈下を表しています。この計算における不動点は、水平位置を固定した四国と紀伊半島を取り囲む九州・中国・近畿地方の一等三角点 13 点です。

カスリーン台風洪水調査報告書付図（複製）



利根川及荒川の洪水の進行



利根川及荒川の洪水の深度

昭和 22 年 9 月のカスリーン台風は、戦後復興に歩み始めた直後の首都圏に深刻な洪水被害をもたらした台風です。

地理調査所は、利根川洪水域と熊谷市付近の荒川洪水域について現地確認と空中写真判読による調査を行い、洪水の進行状況、浸水範囲、最大浸水時の深さ、湛水期間などを地図上にまとめました。

そこから見えてきたのは、低地のわずかな土地の起伏が洪水の範囲、流路、深さ、期間などと密接に関係すること、さらには微地形を詳細に分類すれば洪水を受けやすい地域と受けにくい地域の識別につながることなどで、現在、防災地理情報として発展しています。

焼け跡からの復興

「戦災復興誌　第壱巻（昭和 34 年 3 月　建設省）」によれば、先の大戦で空爆・艦砲射撃による日本国内の被災都市は、調査時点で返還前だった沖縄を除いて 200 を超え、その人的・物的被害は甚大なものでした。罹災面積は約 645km²、罹災戸数約 233 万戸、罹災人口約 1 千万人、うち死者は約 33 万 7 千人、負傷者は約 43 万 6 千人、一都市で 100 人以上の死者を出した都市は 84 都市にも上ります。

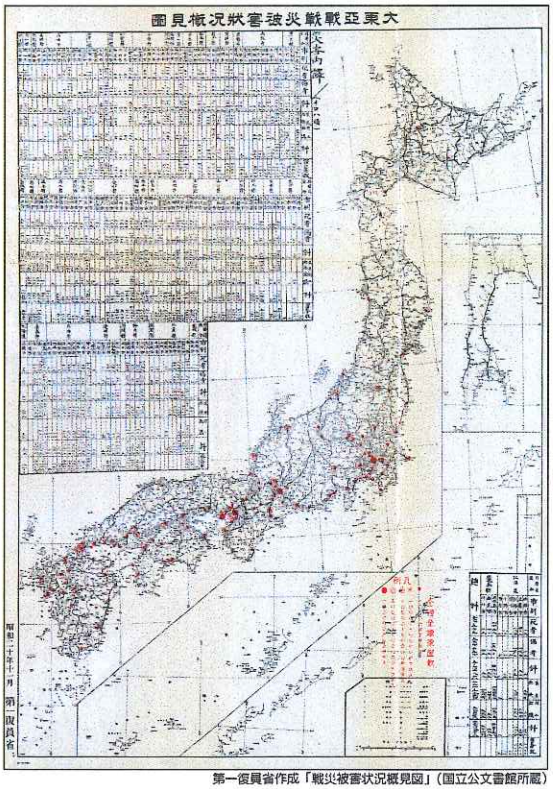
政府は、特に被害が甚大であった主要 115 都市を選びこれを戦災都市に指定、土地区画整理事業を施行して復興事業の基盤とすることとしました。しかしながら、終戦の混乱期にあって、食料、資材、人材のいずれも不足する中、焼け跡に都市を再建するということの苦労は並大抵なものではなかったと想像できます。

戦後 70 年、復興に向けた国民の努力により日本は戦災から立ち直り、経済成長とともに大きく発展してきました。

【終戦直後の日立市中心部】 1946 年米軍撮影

【現在の日立市中心部】 2012 年撮影

日立製作所の主要工場のあった日立市とその周辺には、昭和 20 年 6 月 10 日と 7 月 19 日の 2 回の空襲と、7 月 17 日から 18 日にかけての大規模な艦砲射撃が行われました。都市人口に対する罹災人口は 80%を超え、全国でも最も激しい攻撃を受けた都市のひとつに挙げられます。戦後間もなく撮影された市の中心部の写真を見ると建物は壊滅的な被害を受け、地面のいたる所に着弾による丸い穴があいていることが見てとれます。



第一復員省作成「戦災被害状況概見図」（国立公文書館所蔵）

水戸市

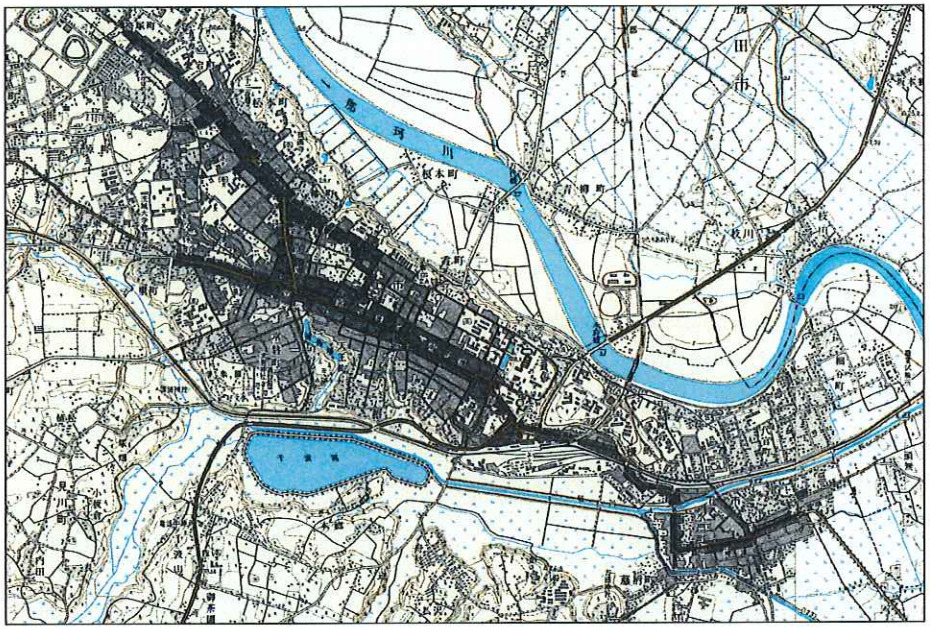
【水戸の戦災概況】

水戸市は、終戦間際の昭和20年8月2日未明に大規模な空襲を受け、千波湖北側の台地上に広がっていた当時の市街地のほとんどが焦土と化し、死者は300人を上回りました。

全国主要都市戦災概況図「水戸市」（国立公文書館所蔵）

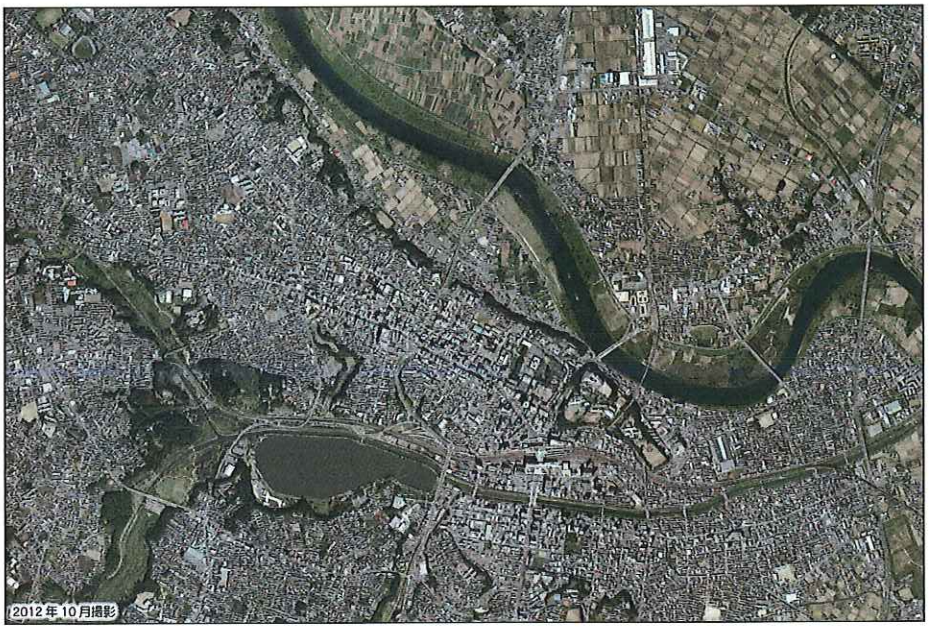
【戦災地域の復興】

右の地図は、昭和35年修正の2万5千分1地形図です。主要な道路に沿うように商店街の建物が連なり、その周囲にも密集家屋が広がっています。戦災で焦土と化した地域の復興が見てとれます。



【都市の成長】

右の写真は、現在の水戸市です。千波湖の南側や西側の台地、水戸駅南側の低地にも住宅がびっしりと建ち並らんでいます。戦災から復興し、経済成長と共に都市が発展してきたことがよくわかります。



全国主要都市戦災概況図

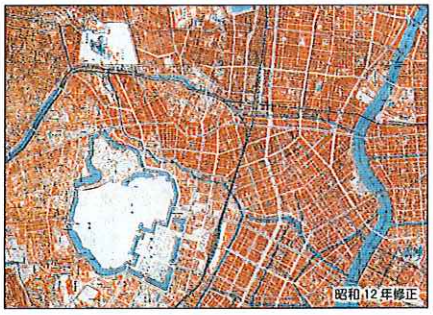
昭和 20（1945）年 12 月、戦災の概況を復員帰還者に知らせるために、第一復員省資料課によって、全国主要都市戦災概況図は作成されました。まえがきには、「当時帰還しつつあった復員軍人軍属の内地上陸にあたっての質問第一声が、概ねまず戦災概況についてであることを知り、この調査の重要性とその迅速な調整の必要とを痛感した」と述べられています。

この図は、附図第 29 号「水戸市」です。終戦間際の昭和 20 年 8 月 2 日深夜の空襲による被災区域が表示されています。

（国立公文書館所蔵　拡大複製）

東京都心

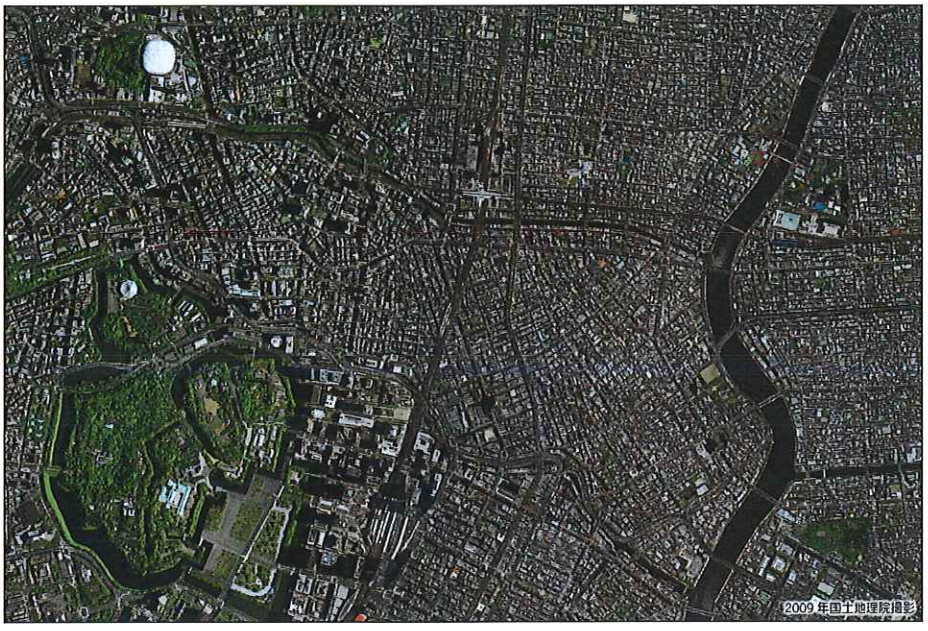
【空襲前の都心】



左上の写真は東京大空襲を受ける前の空中写真です。皇居周辺では建物が密集しているのがわかります。また、東京駅西側には大きな建物がみえます。

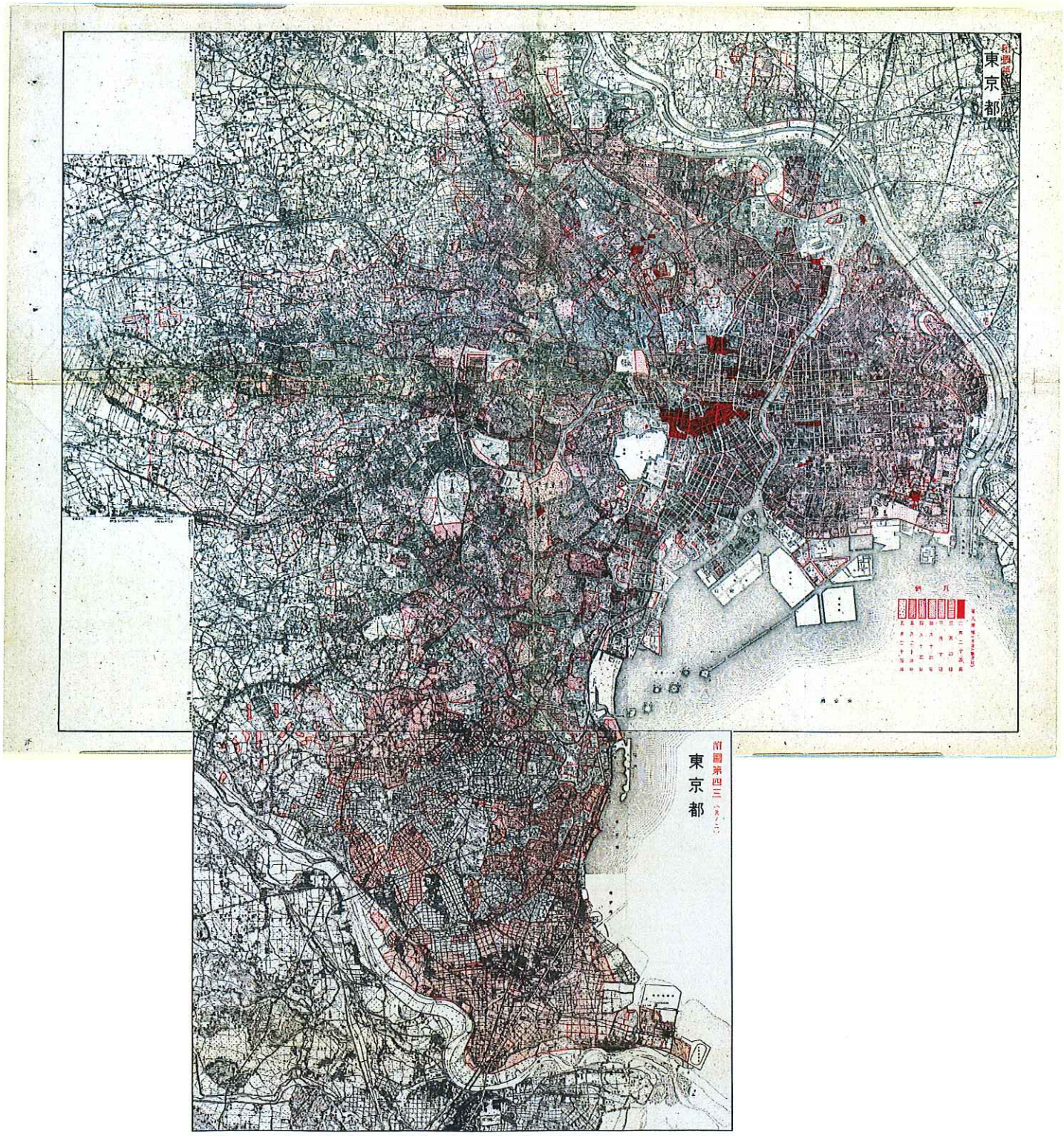
【戦後の都心】

左中と上の写真は、東京大空襲を受けた後の昭和 21 年に撮影された空中写真です。戦災を受けずに建物が残った所もありますが、ほとんどが戦災で白く空地になっているのがわかります。



【現在の都心】

戦後約 70 年経った現在の東京からは、戦災の跡すら見られません。日本の経済成長と共に現在の新しい姿が形成されています。



昭和 20（1945）年 12 月、戦災の概況を復員帰還者に知らせるために、第一復員省資料課によって、全国主要都市戦災概況図は作成されました。まえがきには、「当時帰還しつつあった復員軍人軍属の内地上陸にあたっての質問第一声が、概ねまず戦災概況についてであることを知り、この調査の重要性とその迅速な調整の必要とを痛感した」と述べられています。

この図は、附図第 43 号「東京（その1、その2）」です。終戦間際の昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲をはじめ、たび重なる空襲による被災区域が表示されています。

（国立公文書館所蔵）